

松本 茂

## 私の「カレンダー論」

1989年1月に天皇が死んで、「昭和64年」は「平成元年」に化けました。「平成天皇」が「崩御」したら、またまた「〇〇元年」を繰り返すのでしょうか。いやいや、なんせ長寿社会ですから2000年も、無事に平成12年ということになりましょう。「大正10年」生まれの老人はその時何歳か、なんて悩まず、 $14 - 10 + 63 + 12 = 79$ などという単純算数は日本人たるもの瞬時にできなければいけないようです。

わが国の賢い官僚たちは、昭和天皇の死の10年前に、「元号法」なる世にも短い法律を成立させています。①元号は、政令で定める。②元号は皇位の継承があった場合に限り改める。

これで全文です。この仕掛けで、元号表示の「伝統」が法制化され、世の中なんとはなしに、平成8年と表記するように強いられているわけです。時間をネーミングするという楽しみを内閣に与えた日本の国会は、なかなかの粹人の集まりです。ところで、古来どこの国も記年法には苦労したようです。ユリウス・カエサルの「ガリア戦記」をみると、『メッサーラとピソーが執政官の時…』などと表現されていますが、この手法は共和政から帝政に変わっても継続されたようです。日本も含めた中国文化圏では、皇帝や天皇が「元号を定め」てきたのはご承知の通りです。

いわゆる西暦、イエス・キリストの誕生年を紀元とする名案は6世紀のローマ修道士ディオニュシウス・エウシグウスの発明とかで、西欧世界で

普遍性を持ったのは、8世紀から10世紀にかけてのようです。どうも、マホメットによるイスラム教の広がりやイスラム紀元の出現が背景のようにも思えます。スパンの大きなキリスト紀元は、実用的で年代記の表記もスマートなものにできます。世界共通記年法の地位を得たのは、西欧列強の力の結果かも知れませんが、表記の便利さは大きな要因でしょう。いまだにキリスト紀元に逆らっているのは、イスラム国の一部と台湾（孫文革命紀元）、日本くらいようです。

キリスト紀元の最大の泣きどころは、キリスト以前の記年をBC記号でマイナス表記しなければならないところです。旧約聖書による「天地創造紀元」なるものはキリスト誕生の5508年3ヶ月25日前のこととされていますから、有史以来の事象はすべて単純記年で、古代史家もたいへん便利になることでしょう。かの「ローマ帝国衰亡史」のギボンも、天地創造紀元が生き残ってくれたら歴史家は楽できたのに恨めしく思うとぼやいています。天地創造紀元では、今年が7504年となります。2496年後には、10,000年になりますが、それまで人類史が継続していると、ちょっと面倒なことになりそうです。このところ騒がれている「ミレニアム・バグ」2000年問題どころではない、5桁年表示問題などということがでてくるか。でも、2500年も先には今の電腦は存在しないでしょうから、今から悩むことはなさそうですね。

とはいえ、日本国が「元号」にこだわって、不便極まりない「平成」を死守するのは何故でしょうか。私もキリスト者ではありませんが、普通の暮らしをしていく上では西暦は便利なのに、役所に出す書類は元号表記しなければ受理してくれないという不愉快なバリアーにぶつかります。

「平成」になったのだから、「昭和」のことは忘れました。解決済みです。そんな大昔のことを蒸し返されては困ります。ということなのでしょう。このところ、そうは旨くないようで、「偉い」人たちも冷や汗のかきどうしです。早く厄介な「平成」を逃げ出したいのではありませんか。

☆まつもとしげる  
(株)生活美学社 / 小田原  
Nifty:RXL12052  
E-Mail:smat@pat-net.or.jp



中村政子

## スプリングフィールド窯と青藍洞窯展

私の夫＝サイモン・ピゴットが橋渡し役を続けてきた、日本のいなかとイギリスのいなかをつなぐ文化交流も、今年で6年目になりました。

去年は、琵琶演奏に日本語と英語の語りを入れた「平家物語」をイギリスで上演しました。二カ国語のストーリー・テリングというのは新鮮だった様子。また物語の内容も聴衆の耳に届いたようで、なかなかの評判を得ることができました。

さて今年はいギリスから日本へお客様の番です。今年のお客様は陶芸家のフィリップ・リーチです。フィリップはいギリスの田舎、デボン州ハートランドに住む村の陶芸家です。彼の祖父はバーナード・リーチ、その二男マイケルの長男として生まれました。やはり陶芸家の父から子供の頃より陶芸を学び始めましたが、大学卒業後、美術の教師となり、陶芸から一時遠ざかっていた。しかし後にイランに行き、そこで教師をしている間に、また陶芸への興味が湧き上がってきました。帰国後、父と義兄のクライブ・ボーエンについて再び陶芸を学び始めました。その間、父の弟子だったフラニーと結婚し、1979年二人でハートランドにスプリングフィールド窯を開きました。

フィリップが子供の頃、彼の一家はセント・アイヴスのリーチ・ポタリーの隣に住んでいました。時々お許しが出て隣のおじいさんの家に入ると、そこには提灯や中国の書の拓本などの見慣れぬものが飾られ、台所からはかいだことのない匂いが流れていたことを憶えているそうです。おじいさんはたいていこの家を留守にしている、「日本に行っている」ときかされていました。フィリップにとって、このおじいさんはやさしいけれど、心がいつも違う世界を向いている不思議な人でした。おじいさんは、どうしていつも日本に行くんだろう？そこには何があるんだろう？子供時代そう思った国に、時が熟して、フィリップもやって来ることになりました。今回の来日では、飯田に住む陶芸家、川手敏雄さんの青藍洞窯に滞在し、一緒に仕事をします。またフィリップとフラニー、川手さんの三人の作品も展示します。その他、松本、東京、益子といったバーナード・リーチゆかりの地を訪れる予定です。お近くの方、興味をお持ちの方、ぜひお出かけ下さい。

10月6日

伊那市公民館にてワークショップ(10:00～12:00)と講演会(14:00～16:00)

10月9日～15日

スプリングフィールド窯と青藍洞窯展

飯田市千代の青藍洞窯にて(10:00～18:00)

☎0265-59-2016(川手敏雄)

10月13日

青藍洞窯にてワークショップ公開

10月14日

飯田市創造館にて講演会(19:00～21:00)

10月16日

松本国際デザインキャンプにて記念講演(16:25～17:55)

10月19日

東京・日本民芸館にて講演会(18:00～20:00)

10月20日 益子行き、10月22日 帰国

詳しいことをご存知になりたい方は

☎0265-39-2846 ピゴットまで連絡を。

☆なかむらまさこ／長野県大鹿村

山本実紀

## 呼吸する・紡ぐ

2年ほど前のこと、木綿が好きという私の話を覚えていた友人がチャルカを送ってくれた。

チャルカは、ガンジー翁が投獄されていた時にも、日々、糸を紡いでいたことで知られる、どこでも紡げる折畳み、手廻しの紡ぎ道具。木でできた分厚い辞書という感じのブック型からスーツケース型のいくつかのサイズのものまで、何種類かの大きさがあるらしい。送られてきたチャルカは、スーツケース型の小さめのもの。横長のふたを開くと、右手に大小のホイールがあり、左手には紡錘(つむ)を差し込み立てて、ホイールと紡錘の糸の張りを調整する様になっている。紡錘2本、かせ上げ用の枠になる部分、紡ぐ時にチャルカが動かない様にする押えは、畳んだ時はきちっと収納される。糸を紡いで総にするまでの機能がこの中にすべて納まっているという感動的な道具だ。

この友人は、インドのガンジーアシュラム(彼女が行っていたのはWardhaのアシュラム)という、ガンジーの教えを守り、実践している場所で3ヶ月程、生活を共にしてきた。朝めざめると瞑想、畑の仕事、食事、そしてチャルカを廻して糸を紡ぐ。日々それを続ける。静かな淡々とした暮らし。畑仕事もチャルカでの紡ぎも、自分で自分のものをまかなうという自給自足の教え。少ししか糸を紡げなかった人は、短い着物になるとか・・・ふーむ。

いただいたままに放って置いたチャルカを紡ぎ

始めたのは昨年のこと。右手でホイールを廻しながら、プーニーという綿を篠状にしたものを左手で引いていく。ゆるやかに撚りが伝わっていく。糸を引いていくことと呼吸が自然に合っていく。心が鎮まり、呼吸が深くなる。不思議な心地良さだ。出来上がりの糸は、まだまだ凸凹だけれども、紡ぐ心は遙か昔から紡ぎ続けている人のよう。そうか、紡ぐことも瞑想なのだとひとり納得しながら糸を引く。歩くリズムと同じ。呼吸を合わせることで、日常をくらしながら瞑想できる。ティク・ナット・ハンの教えを想った。チャルカを廻し、糸を引くリズムが楽しく心地良く、木綿紡ぎがマインドフルな一日のくらしに欠かせないものになってきている。

☆やまもとみき / (株) 種山ヶ原 / 東京

北尾久美子

## 隣家の鳥日記パート5

ほとんど暑さを感じないまま、あたりはすっかり秋の気配。ススキがゆれ、トかう。空っぽの餌台のそばで、ヒマワリの花がひっそりと咲いている。冬の間あんなにたくさん種を撒いたのに、花をつけたのはたった2本だけ。まわりは、オオハンゴンソウ、セイタカアワダチソウなど元気な帰化植物で黄色に染まっている。そして北斜面はキツリフネでうめつくされてしまった。これもまた黄色の小さな舟形の可憐な花をたくさんつけている。種がぷっくりとふくらんでくると、ちょっと突いただけでポーンと弾ける。手の中でまるで虫のように跳ねるので、知らない人を驚かすには楽しい種だ。キツリフネの根元がユサユサ動くと思ったら、久しぶりにアオジの親子が顔をだし、せせせと虫をついばんでいる。もうほとんど親と見分けがつかないほど育った幼鳥が夢中になって地面を歩き回る。この時期になると、子育てを終えてボロボロになった親鳥の翼や尾羽もはえ変わり、夏鳥たちはいよいよ渡りの季節を迎える。

街にも近いが“気分は山暮らし”を楽しんでいたのもつかの間、あっと言う間にあちこちで新築工事が始まった。毎日、ブルドーザーやコンクリートミキサーの唸る音、丸のこ、金槌、トンカントンカンにぎやかな音が鳴り響く。わが家ができた時も、きっとこんなふうだったんだろうなあ。でも、どうして人間の巣には、こんな大げさな造作やスペースが必要なのでしょう。鳥たちは毎年、慎重しく、ひそやかに巣を作り、必要な分だけの巣材しか使わないのに。でも、少しは考えなくては。こんな山の上に来て、斜面に無理やり巨大なコンクリートの壁を造り、どこからか土をどっさり持

ち込んでまで平らな土地にする必要があるのか。何十年生えていた木だって、工夫をすれば切らなくてすむものもあるのに。お構いなしに全部切ってから、後で何やら場違いな庭木を植えることになる。何だか愚かしいことをしているんだよなあ。

☆きたおくみこ / バードカービング作家  
スタジオ ZERO 主宰 / 札幌

永田温子

## 体験！＜山羊の食卓＞

まだまだ山羊のおっぱいをしぼっています。

きれいに澄んだ瞳の Bebe を眺めながら、時折りジェーッと鳴く、新十津川からやってきた若い雄山羊ロビンを聞きつつ、今年のおっぱい総まとめを味わっていただきます。山の木々の紅葉がバックです。

とき：10月の毎土曜日と日曜日と祝日

11：00AM～4：00PM

ところ：とんねる屋敷内外

メニュー：山羊チーズ数種

山羊チーズカレー（インド風）

山羊ソーブレッド、

山羊チーズケーキ

山羊乳アイスクリーム

山羊乳紅茶 など

数年ぶりに去年の今ごろ、インドはマドラスから札幌を訪れたドクター・ムーティーが、「あっ、ポテトがもう少し煮えてからね。ミントは最後に。」とわが家でカレーを作ってくれました。多才なムーティー氏は結婚後、愛妻シャマラから料理を勉強したということですが、亡き母上の「とても上手だった」料理が下地にあったようです。何げない風に漏らされた言葉、「料理はアートです」。いつ

も心にひっかかっています。そう、10月はちゃんとアートしたいと考えています。いかが？



☆ながたはるこ  
小別沢・山羊<sup>2</sup>クラブ  
札幌

## 古山恵一郎 都市博

都市博に行ってきた。いや、正確に言うならば、本来、東京都の主催で臨海副都心に人を集めようと計画された都市博で目玉となるはずであったポンピドゥ・センターの企画になる「近代都市と芸術」展に行ってきたのだ。

偶々八ヶ岳山麓に通っているので、帰りに多摩センターに泊まって週末の多摩丘陵を横浜まで下がり、湾岸の高速道路をちょっと覗いてみたのである。多摩丘陵に広がる、現代日本をある意味で代表する住宅街と、湾岸で宙吊りになった未来都市の光景と、木場の裏通りと、現代美術館の展示がごちゃ混ぜになって、なかなか面白かった。

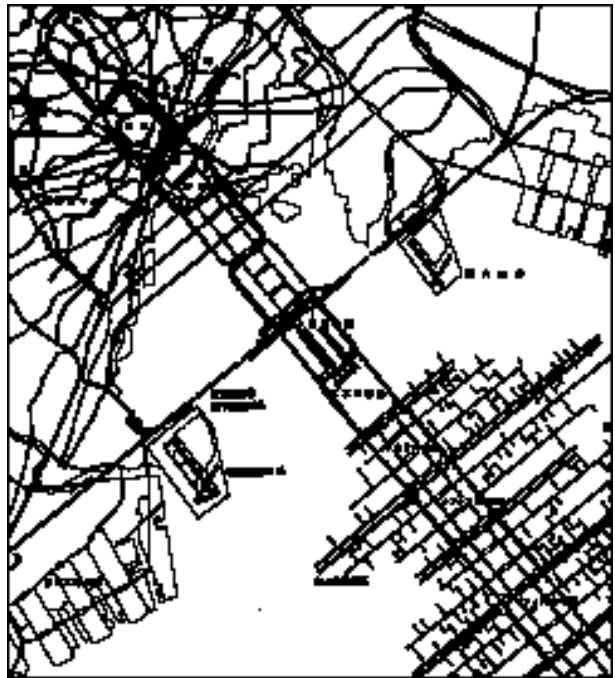
「寓居」という言い回しがあるが、多摩丘陵は果てしなく続く「寓居」の群れに見えた。広辞苑によれば「寓居」は

1. かりに身を寄せている住居。かりずまい。僑居。
2. 自分の住居の謙讓語。

とある。浮世は仮の世である、という無常感の上に、住まいなどに執着するのは武士の恥、下知あらば全てを投げうって主君の元に馳せ参ずる、という江戸の町を作ったさむらい達のサッパリ気質を乗せたような、住居に対する姿勢を表わす。何度も言うが江戸は征夷大將軍の軍事基地とそのゲート前であった。そうした武士の心意気を表わそうとしてか

「〇〇寓」などと表札に記したりする。これではまちづくりなど出来る訳がないではないか。サッパリ気質の上に「住みたいところに住む」のではなく、「仕方がないからここに住む」が重なると、もう、どうしようもない。武士の心意気はいつしか、まちなみに対する無関心に変わる。「オレの所為じゃないもんね、まちづくりなんて「お上」の考えるこってしょ。」

首都高速道路湾岸線はそうした「お上」の考える未来都市を見せてくれていた。川崎の工場群と空港はガルニエの線形都市であったし、大井と有明には1930年代に流行した機能主義的高層ビル群が並んでいた。それらをひとまとめにして東京湾に広げて見せたのが丹下健三研究室の「東京計画1960」であった。首都高速道路湾岸線はまさにその第一段階に当たる訳だが、既に4時を廻ると至るところで渋滞が始まっており、木場から東名横浜インターまで2時間以上掛かるのだ。全ての自動車が指定速度で走るためには車が一台増える毎に2,000万円の道路設備費が掛かるというのではないか。そのような交通手段を用いて快適な生活が出来る、その昔でさえ仮定出来たのは「車を買えない大勢の人々」が存在し、道路用地は限りなくタダに近いアメリカ合衆国位のものであった。エドワード・ホッパーの絵から見



るとアメリカ人の移動速度が1920年代から60年代のあいだに時速30マイルから50マイルへと上がっていることが感じ取れる。時速30マイルで憂鬱な顔をしていたホッパーの絵の登場人物達は、時速50マイルでもやはり憂鬱な顔をしている。

「近代都市と芸術」展ではホッパーを含む北米の作品が殆ど含まれていないが、87年にスミソニアン博物館では国際居住年に向けた住宅展を開催しており、「近代都市と芸術」展はこれに対する「返し歌」ともいえる。そのアメリカ合衆国でさえ道路予算の重圧に耐え兼ね、我が国の国鉄が民営化されると前後して、営利を目的とせず、自動車交通の軽減を主な任務とする公営鉄道の強化が始まった。「CIAMよさようなら」を合言葉に「ニュー・アーバニズム」を主張するグループはそうした公共交通機関を主な移動手段と考えている。

世界企業の収益番付の上位は相変わらず米国のビッグスリーで占められているようだが、国民が自動車会社の収益に奉仕しなければならない割合は日本のほうが遥かに高いであろう。円高による産業の空洞化も自動車会社にご奉仕の側面が鼻に付く。そして売れなくなった乗用車を引き受けるためか、多摩丘陵の道路は違法駐車で埋め尽くされていた。

ポンピドゥ・センターの企画になる「近代都市と芸術」展の後ろには、金魚の糞の如くに日本側で準備した「第二部」とやらが続いていたが、くたびれてしまった私は出口へ向かった。カタログのフランス語から日本語への翻訳同様、内容が実にお粗末なのだ。予算を削られたということも言い訳にはなるだろうが、それよりも都市博が中止になったいきさつを世界に向けて裏表なく恥晒せば、「第一部」をきちんと受けて21世紀の都市像を表

現する絶好の展示となったであろうに。

(図；東京計画 1960)

☆こやまけいいちろう／建築家：ASK Inc.／浜松

### 三上敏視

## 最 近 の 細 菌

下の娘は今小学校一年生だが3月15日生まれなので月齢が低く、なんとかついていっている状態である。本人はそれなりに張り切って行っているが体は正直で膝の裏に湿疹が出たりしている。夏休みには治ると思っていたら案の定良くなったが、2学期が始まったのでまた広がるかもしれない。いざとなったら学校から救出しなくてはならないかも。

で、この湿疹に前号で紹介したコパイバオイルを使ったために私の顔のシミに使う余裕がなくなってしまった。結果を待っていた方には申し分けない。おまけに夏はUVなんのそので日焼けをするようにしているのでシミも目立たないのだ。ただ、日焼けをしてもシミは増えていないし薄くはなったような気がする。

さて小学校一年生の2学期というと0-157が心配の今日この頃。エイズならセックスと麻薬をやらなければほぼ防げるが、ものを食べないわけにはいかないの、ワクチンのようなものや効果的な薬が出るまではお手上げじゃないだろうか。そして薬については細菌の抵抗力とイタチごっこになるのでこの先、命を守ることに運が大きく左右することになりそうだ。

日本人は自分を無宗教と考えている人が多いとよくいわれる。それに対して葬式は仏教だし、初詣には神社にいくし、会社には神棚があって車にはお札をぶらさげているし、家を建てれば地鎮祭をするしということで宗教だらけじゃないかともいわれるが、宗教は死生観であるという見方をすると、今の日本人はそれがはっきりしていないので無宗教ということになるかもしれない。そして運が悪けりゃ感染、明日はわが身ということになれば案外、この細菌というものによって我々は死生観を取り戻すかもしれない。

我々の体内には何億何兆という細菌がいて共生していて、これらがいないと生きていけない。0-157が怖いからといって殺菌作用のあるものばかり摂取すれば必要な菌まで殺してしまうことになる。また、大腸菌は塩素に弱いということでせっかく高いお金を出して取りつけた浄水器をはずし

た人もいるかもしれない。水道水のリスクと大腸菌のリスクを秤にかけなくてはならない。相手が細菌でなくても、例えば蚊取り線香の成分は農薬と同じなのでいくら無農薬野菜を食べたって蚊取り線香や蚊取りマットの農薬を思いっきり直接吸い込んでることになる。食堂によくぶら下がってる虫避けには薬局で名前を書かないと買えない強力な劇物もあるし、抗菌グッズにはかなりの危険物があるわけだ。自分に都合悪いものをなくしてしまおうというこれまでのやりかたをしてもだめなんじゃないのということがはっきりしてくるわけで、共存して折り合いをつけなければならぬわけだ。すでに抗生物質という武器を持ったためのしっぺ返しで現代人の抵抗力がなくなって、バリ島で日本人だけがコレラになったりして警告は受けている。ガンだっけ受け入れるようになってきたのだから細菌とも折り合いをつけたいところだ。

じゃあどうすればいいかという、免疫力や抵抗力のある体にして「運」を強くするのが「自然」ではないかと思う。これまでに紹介したEMや波動のコンセプトはそのへんにあるし、気功や各種伝統医療も死生観と共にあるのでよりどころになってくれるだろう。

自然回帰指向もここで、単なる都市生活のストレス解消の自然と遊ぶ脳天気ナチュラルリストから、「厳しい自然」を畏れ敬って神を見出すナチュラルリストにならなくてはならないだろう。友人のチベット人はヒマラヤで遭難事故がある度に「山にはいる前にちゃんとお祈りしないからだ。お祈りすれば絶対大丈夫」と言っている。この「絶対大丈夫」と信じるところが重要で、これからは食事のたびにお祈りしたほうがよいのではないか。

先日カムチャッカで写真家の星野道夫さんが熊に襲われて亡くなった。頭以外は食べられたそうである。植村さんのときも感じたが、この人達の場合は自分のしていることが解っていて神の領域に魅入られたのだから、そこでの死は神に同化したものではなかったか。植村さんは山になって、星野さんは熊になった。おとぎ話でなく本気でそう思うような死生観がこれから必要なのではないか。熊の腹を割いて遺体を取り出したそうだが星野さんはそれを望んだのかなと思った。

我々は山になることも熊になることもできない凡人である。でもできるなら納得できる死に方がしたい。細菌はやはり死生観を考えさせてくれているように思う。

☆みかみとしみ／MICA BOX／札幌

5年毎の国勢調査の年、農水省は全国で「農林業センサス」を実施する。この調査項目の一つに、“基幹的農業従事者数”というのがある。基幹的農業従事者とは、仕事として農業に従事している者を言い、日本の農業を実質的に担っている人たちである。この基幹的農業従事者の年齢構成で、最も多い年齢の推移をみると、ある感慨に打たれる。

1975年45～49歳、80年50～54歳、85年55～59歳……。5年毎に、5歳ずつ年齢が増している。このことは、1926年（昭和元年）から30年（同5年）にかけて生まれた昭和一桁世代が、戦後のこの国の農業を一貫して支え続けてきたことを意味している。

終戦の年（1945年）、彼らはハイティーン。育ち盛りは飢えの時代だった。まもなく農業は復興する。食糧増産のため懸命に働く親を手伝いながら、彼らは農業を自分の職業として“宿命的”に選択していったにちがいない。1961年。「農業基本法」が制定され、農業は“近代化”の時代を迎える。この時彼らは30歳台前半。村の多くの若者が“高度成長”に沸く都会に出ていくのを横目で見ながら、農家経営の責任はもう彼らの両肩にずっしりとかかっていた。“選択的拡大”の掛け声に乗り、零細な複合経営から畜産、野菜、果樹などの専門に切り替えていくのもこの時からである。親の世代までは何でも作り、何でもできる“百姓”だったが、彼らは一芸に秀でた“プロフェッショナル”の道を選んだのである。

1995年。この年の「センサス」でも相変わらず彼らが基幹的農業従事者数のピークを維持している。その数およそ57万人。けれども彼らは既に60歳台後半に齢を重ねている。40歳台の働き盛りだった70年代半ばには、彼らの世代は80万人近くいた。この20年程の間に20万人の仲間が農業から去ったのである。そして今から4年後の2000年、彼らはいずれも70歳台を迎える。戦後の農業を支え続けてきた彼らに、まもなく引退の時期がやってくる。

95年現在、基幹的農業従事者数は全国で277万人。そのうちの20%を占める57万人の農民たちの引退は、戦後の農業の一時代に幕を引くだろう。この国の農業はほどなく大きな転換期を迎える。

農水省は92年立案した「新政策」で、2000年には35万から40万戸の“中核農家”が日本の

農業を担う、というシナリオを描いている。つまり昭和一桁世代の引退は農業の危機ではなく、少数のエリート農家へ農地を集積する大きなバネになるというのだ。農地の集積とは、廃業する小規模農家の農地を一部の農家に集め（委託耕作など）、農家経営の大規模化を果たそうとする手法だ。

このシナリオ通り事が運ぶだろうか。農家は簡単には農地を手放さないだろう。この国の経済は既に失速し、失業者が増加しつつある。仕事を失った人々は故郷の農村に戻り、零細な農地を足場に自給的な暮らしを求めるのではないか。それに山間地の農地は“大規模化”はそもそもなじまない。人手が失われれば、畑は草に埋もれ自然に戻っていく。山崩れ、洪水などが多発するだろう。

農地の集積が思うにまかせられないなら、企業的な経営体が出現し、21世紀型の新しい農業が生まれるというシナリオは崩壊する。結局、人手の減少と共にこの国の食糧供給力は一気に低下し、食糧不足の時代がやってくる。

日本の食糧自給率は年々低下し、現在では供給熱量ベースで50%を大きく切っている。膨大な農産物が海外から送られてくる。それらの農産物を仮に国内で生産したら、どのくらいの農地が必要だろう。農水省はそれを約1500万haと試算している。現在日本列島にある農地はおよそ500万ha。その3倍である。この数字をみるかぎり、逆立ちしても食糧自給は不可能と分かる。

1500万haの内訳をみると、トウモロコシと大豆がそれぞれ500万haずつ、残りの大部分を小麦と肉類が半々ずつ占めている（肉類は、家畜をトウモロコシで飼育することを想定し計算している）。

トウモロコシは、日本列島に暮らす牛、豚、鶏など、家畜たちの主食だ。そのトウモロコシはほとんど輸入物である。家畜の主食を国内で自給しようとするれば、国中の農地すべてを使わなければならない。人間の主食の生産はできない。一方輸入される大豆の大部分は食用油の原料になる。味噌、醤油、豆腐などに加工される分は20%にも満たない。日本人が消費する食用油を自給するには、やはりすべての農地を大豆で満たさなければならない。

つまり食糧自給の最大のネックは、畜産物と油である。これらの食品の摂取量を現在のまま維持しようとするれば、食糧自給はありえない。逆に、畜産物と油の摂取量を落とせば、それだけ自給に近付く。

食糧自給の立場から考えれば、トウモロコシを主食にした家畜飼育は廃止すべきだ。その代わり、兎、山羊、羊など、草食の中小家畜を飼育する。豚は残飯や草で育つ小型の品種を復活させる。牛は肉用というより、役用、あるいは堆肥供給の役目が待っている。要するに高度成長以前の農業、暮らしに戻るのである。

ところで、輸入されるトウモロコシ、大豆、小麦の大部分はアメリカ合衆国で生産されたものだ。合衆国中西部は“世界のパン箆”ではなく、“日本のパン箆”である。中西部の農業が健在であるかぎり、日本人の食生活も安泰というわけだ。けれども中西部の農業地帯では、農地の“砂漠化”が進行し、生産の持続性が疑われている。

農産物の移動は、それに含まれる栄養分の移動である。栄養分はもともと農地に存在していた。合衆国から日本に輸出される穀物に含まれる窒素分は、年間約60万トンにもなる。この量は、日本列島で1年間に消費される化学肥料の80%に相当する。それを補うため、中西部では大量の化学肥料が使用される。その結果土はパサパサと軽くなり、雨に流され、風に飛ばされていく。こうして農地から表土が失われる。不毛の心土が剥き出しになった農地は、次々と放棄されていく。“日本のパン箆”の危機は、たちまち日本の危機となる。“飽食ニッポン”の行く末に赤信号が灯っている。

ところで、合衆国から大量の栄養分を受け入れた日本列島では何が起こるか。輸入農産物に含まれた栄養分のほとんどは、人間や家畜の消化管を経てし尿となり、下水処理場に送られる。現在の処理技術では窒素やリンなどの栄養分の除去はむずかしい。処理水に溶けた栄養分は川に放流され、海や湖に流れ込む。こうして日本列島の水系は合衆国の農地に由来する栄養分で富栄養化し、たえず赤潮、青潮に悩まされる。農産物の移動は、送り出す方でも、受け取る方でも甚だしい環境破壊をもたらす。一方は枯渇が原因で、一方は過剰が原因で。

合衆国の農地がいつまでも“日本のパン箆”であり続ける保証はない。近代化を迎えつつあるアジアの国々では、肉食化が進行している。これまで日本に輸出されていた飼料穀物は、これらの国々と“取り合い”になる。“日本のパン箆”は“アジアのパン箆”へと膨れ上がる。一方、合衆国自身の農産物の需要も高まるだろう。先進国の中で合衆国だけが、今後も人口増加が予想されている。合衆国は国内に“第三世界”を抱え込んでいるし、これからは世界各地から様々な移民、難民が“自由の国”

を目指して流れ込むであろうから。“日本のパン箆”は正しく“アメリカのパン箆”に戻っていく。

買うことは簡単なことではない。まず金（かね）が必要だし、金があっても、売ってくれる物がなければだめだ。戦後の日本は金があり、売ってくれる物もあった。けれどもその二つの条件が揃ったのは“たまたま”だったのではないか。今後この国に金があり続ける保証はない。仮に金があり続けたとしても、売ってくれるものがいつまでもあるとはかぎらない。

現在、世界の人口は57億人。それがいま猛烈な勢いで増えている。年平均増加率は20世紀前半0.8%であったが、後半には1.8%と増加した。国連の推計によると、今後増加率はやや減速するものの、21世紀半ばには100億人を越えるという。人口の増加に食糧の増産は追い付くのか、と誰でも心配になる。結論はおそらく否であろう。

農産物の収穫量は作付面積と反収で決まる。この二つの要因は今後どうなるか。

いま地球上には、14億haの農耕地と34億haの放牧・採草地がある。これらの面積を合計すると、地球の全陸地面積（149億ha）の32%にもなる。つまり人間という生物は現在、自らの食糧確保の空間として全陸地の3分の1を独占している。

農業用地の設定は、もともとそこに暮らしていた莫大な種類の野性動植物を追い出し、その代わりに作物や家畜という特定の生物を増殖させることだ。人間の行う農業という営みは、地球の生物種の多様性を著しく損ねてきた。限りある草原や森林を破壊するやみくもな農地造成は、もはや許されないだろう。現実には、耕地に転換できる肥沃な土地はもう地球上にほとんど残されていない、と言われている。どうやら農業という営みは、空間的には既にほぼピークに達したようだ。

むしろこれからは農業用地の減少が懸念される。

60年代の日本で起こった急速な都市化と工業化は、第三世界ではいよいよこれから本格化する。日本列島では1960年から現在までに、全体の14%、83万haの農用地が消失した。それらの多くは工業用地や住宅用など都市的用地として転換された。一方同じ時期に、お隣の中国では少なくとも3500万haもの農地が減少したと推定されている。その中国でも農地の転用はこれから一層加速される。

問題は都市化や工業化だけではない。農地の“砂

漠化”は、合衆国中西部にとどまらない。化学肥料への過度の依存、過放牧など、不適切な土地利用の結果、現在世界中で合計5億5000万ha以上の土地が土壌劣化のため、次々と放棄されている。

一方、反収はどうか。

1950年からの40年間で穀物の反収は、合衆国のトウモロコシやヨーロッパの小麦が約4倍、日本のコメが1.5倍に増加している。この技術的要因は二つある。

第一に化学肥料の大量使用だ。化学肥料に鋭敏に反応する品種も開発された。もう一つの要因は、雨の少ない地域で灌がい施設が整備され、河川水や地下水の大量使用が可能になったことだ。このように戦後の大増産は、化石エネルギーや水資源などをふんだんに投下し、その一部を食糧として回収するという相当荒っぽい手法を惜しみ無く適用した結果だった。その結果が“大増産”だったのだが、それと同時に耕地劣化、資源枯渇、環境汚染、それに農産物の質の低下が同時進行し、農業生産の持続性が著しく損なわれてしまった。“大増産”はもう長続きしない。

この10年程の間、穀物の反収の伸びは鈍化してきた。化学肥料をさらに多く与えても、作物はそれに反応しにくくなった。20世紀末の人間は農業用地を確保するために、地球のスペースを極限まで占拠してしまった。そしてその人間はまた、植物が本来持つ生産能力の限界まで利用し尽くしてしまったようだ。

それでも地球上の人間の数は増え続けていた。そして1984年。人間の数の伸びは、鈍化しつつあった穀物生産の伸びに追い付き、それを凌駕し始めた。このとき世界の人間一人当たり穀物生産量は350キロだった。人類史上1984年は画期的な年として、長く記憶に留められるだろう。この年をピークとして一年また一年と、一人の人間に分配される穀物量は少なくなっていく。このままのペースで人口が増え続け、穀物の増産がこのまま低迷し続ければ、2030年には一人の人間の穀物の分け前は1950年のレベル、つまり年間250キロにまで低下すると試算されている。ちなみに現在の日本人は、1年間に300キロの穀物を消費している。

穀物摂取へのブレーキは、現在を生きる57億人の地球人に対して平等にかかるわけではない。穀物摂取には既に甚だしい不平等がある。例えばいま、カナダや合衆国の人々は、年間800～1000キロの穀物を摂取しているが、インドで

は200キロ弱、ハイチでは100キロの穀物しか摂取していない。穀物摂取に緩慢なブレーキのかかった人類にやがて悲劇が訪れるとすれば、それはこの穀物配分の不平等に起因するに違いない。穀物を巡る争奪戦は徐々に激化していこう。その時、リスクを背負うのは“農業弱者”だ。

“農業弱者”とは、充分の土地を持たぬ者(国)、農業には適さない土地しか持たぬ者(国)、そして金のない貧しい者(国)である。このような弱者(国)の多くはもともと、採集や狩猟、あるいは伝統的な自給農業を営んでいた。それが19世紀から20世紀にかけての西欧列強の帝国主義的支配の下で、換金作物の大規模栽培が強制された。その結果人々の暮らしの自給性は失われた。おまけに主に熱帯地方や乾燥地方に分布するこれらの国では、過酷な自然と収奪的な大規模農業の影響が相乗され、土壌の劣化が着実に進行している。現在既にこれらの地域を中心に、世界中で7億人の人々が栄養失調で苦しんでいると言われている。これからはほかでもないこれらの農業弱者に、より大規模な飢餓が襲いかかることになるかもしれない。そして日本という国も紛れもなく“農業弱者”の道をひた走っている。

20世紀は“戦争の世紀”だった。この100年の間に、世界的な大戦争が頻発した。けれども20世紀は同時に、人類が戦争を憎悪し、平和を追い求める“反戦の世紀”でもあった。そして21世紀。この世紀を、人類が飢餓で苦しみ抜く世紀にしてはならない。そうではなく、人々誰もが飢餓を生みそれを固定する仕組みを見抜き、健康で生き生きと暮らせる新しい世界を発見する世紀にしなければならない。21世紀は“飢餓の世紀”ではなく、“自給の世紀”である。

戦争は国家と国家の競争により生じ、人々は国家の命(めい)により殺し合いに駆り出される。飢餓もまた国家と国家のあつれきにより生じ、人々は国家のし意で食を失う。人々が自らの食を国家に委ねるかぎり、飢餓の危機からは逃れられない。食の主体を国家から人々一人ひとりに取り戻すほかない。それが自給だ。もちろん“国家の自給”ではなく、“人々の自給”である。

人々にとって自給への道は、一広がり土地と、それを耕すために必要な時間を取り戻すことから始まる。ささやかにその道を歩み出そう。

庭を耕そう。庭こそ自給的暮らしの原点である。市民農園があれば、そこを耕そう。周辺の休閑している農地を借り、耕そう。故郷に農地があれば、



そこを耕そう。農家に援農に行こう。

国家が与えてくれる食べ物で生きていくのは、楽だ。けれども、自分で耕し、食べ物を得るのは、必ずしも楽ではない。耕せる土地を探し、時間をやりくりする。それに土や作物について多くを知らない。身体を動かせば、たちまち音を上げる。撒いた種(たね)は刈らねばならない。自給は持続するそれなりの意志が必要だ。

しかし、耕すうちに、楽しみが見えてくる。無知はたくさんの発見を与え、世界を広げる。きしむばかりの身体も、鍛えるにつれ動き出す。汗がほとばしる。植物はみるみる成長する。人に特別の技がなくても、生き物は自らの力で育っていく。その感動。そして実りの時。もぎ取ったばかりをほお張る。

文句なくうまい！食べ物を自らの力で得た達成感は一塩だ。 飢餓は苦しみだけを人に与える。けれども自給は楽しみに満ちた暮らしを人に与える。その自給自足の時代がまもなくやってくる。

■最後に私事を書き加えることをお許し下さい。

私はこの夏、明峰惇子との共著『自給自足12か月』(創森社)を上梓した。この本は、私たちの70年代初めから現在に至る農的実践の一つの集大成となった。お読みいただき、一人でも多くの方が“自給する”楽しさを満喫されることになりま

すように...  
☆あけみねてつお  
農業生物学研究室・やぼ耕作団/東京都日野市

### 丹野則雄

### 連載広告<その3>

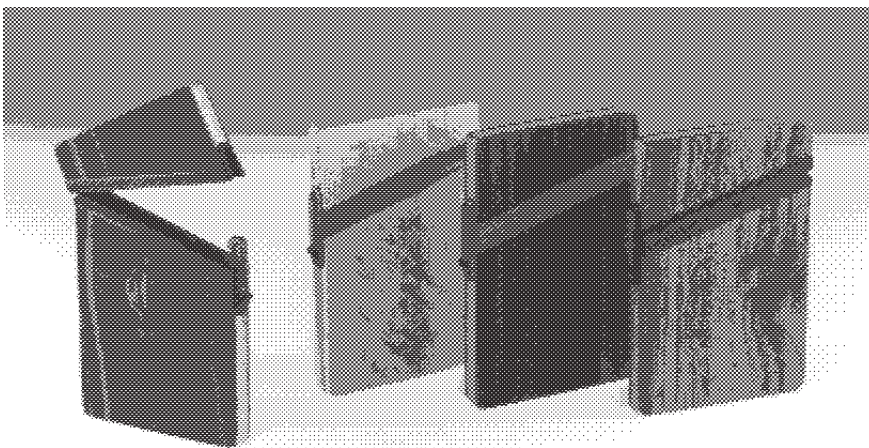
「よくこんな細かな仕事をしますね」と、作品をみた人から言われますが、木工の仕事としては加工する部品の寸法が少し小さいというだけで、特にそんなに精密な細工とは本人は思っていません。最近、年齢のせいから少し視力が弱ってきたのでノギスの目盛りを読むのに苦労しますが、0.25mm (1mmの1/4)の精度くらいは気にして仕事をしているようです。ことさらにこまかな細工仕事が好きという

訳ではなく、どちらかというと、もっと大雑把な仕事のほうが好きなのですが、小さなパーツをたくさん作って並べると、どれも可愛くて、思わず嬉しくなってしまう。小さな細工の仕事をするように

なったのは、小物であれば場所は狭くてもいいし、なんといっても使う材料が小さくてすむということからでした。端材を有効に利用すれば、大切な木材の消費を少しでも少なく出来るとの思いからでもあります。(本当は、厚く、幅広の木材を買うお金がなかったから・・・?)

携帯用カードケースは、現在3種類作っています。この型が一番最初のものです。もう10年以上前から作っていますが、この年(1985年)から、爪楊枝ホルダーなどそれまでより小さな部品を作る木の

仕事を始めました。一番最初にこのカードケースを作った時、止め具の部分(キャッチと呼んでいます)を数個作るのに3日もかかってしまい、売値がつけられるような作品になるのかどうか心配でした。カリン材で枠を作り、別の板をサンドイッチするやり方です。補強のために斜めに入れる「帯」が、表板の木目とクロスするためどうしてもここに収縮による力が集中してしまい、湿気による狂いが出やすくなります。わずか2.2mmの薄板になっても、収縮は止まらないのだなど実感させられました。木の生命に逆らってはいけな



¥8,000 (カリン、ローズ)

- CH-1 カードホルダー
- 材種 カリン・ローズウッド・ナラ・ウォルナット他
- 寸法 10 × 70 × 108 mm / m
- 1985 ~
- ¥7,000 (ナラ、ウォルナット)

クラフト&デザイン タンノ  
〒079 旭川市永山9条3丁目1-19  
Tel,Fax ; 0166-47-3895



森のオブジェ

雑木林に暮らし薪で暖をとっていると、様々な木の表情に遭遇します。曲り、枝の生えぎわ、こぶ、うろ、などの不思議な形やナラやセンノキの樹皮の彫刻など、薪を割る手を休めて見とれることもしばしばです。きつつきが枯木にあけた穴なども芸術的とさえいえます。そんな形を見ているとつ



い"何か"見えてきたりして、ちょっとチェーンソーで刻みを入れたり、エンジュの細枝を輪切りにして目をつけたりしたくなります。エンジュの芯は黒っぽく目のようです。

今までつくったオブジェで名前のつけられたものをあげてみますと、ワニ、カジカ、フクロウ、アキアジ、オオカミウオ（私はオホーツクのオオカミウオを反都会の象徴としている。種類が多い。）、森人、森のヴィーナス、カバゾウ、タコのロクちゃん、タコのナナちゃん、タコのハッチャン、タコのキューちゃん（トド松の枝の輪状の生えぎわを逆さまにしたもの）などなどです。

内野晴日

JIA 北海道支部環境部会展「木」インフォメーション

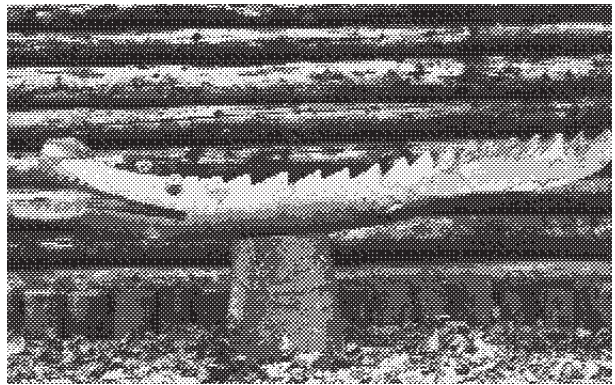
木のいのち

風とうたい 光とたわむれ 水とあそび  
空とかたり 時とあゆむ

木はいのち

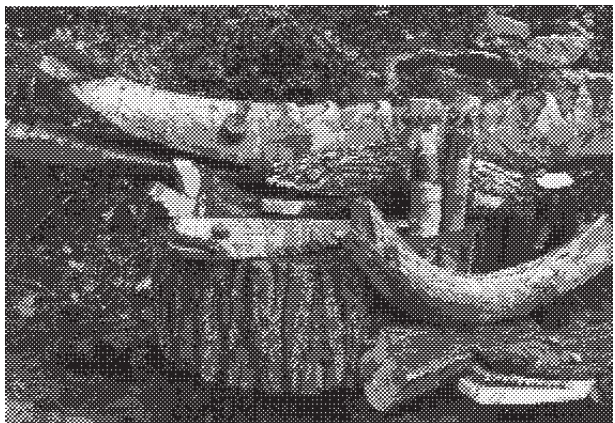
虫をはぐくみ 土をそだて 鳥をはぐくみ  
夢をつむぎ 人をはぐくむ

JIA 日本建築家協会北海道大会にあわせ、JIA 北海道支部環境部会では INAX スペースで展覧会を開催しています。上記はそのコンセプトパネルの一部です。本部会は、数カ月の準備期間を経て昨年 12 月に発足しました。JIA



こんなこと面白がるのは私だけかと思っていたら、先日森の家に訪れた銀座の画商が、面白がって企画していたオブジェ展に出品しろというのです。これは銀座にはあいませんよと言ったのですが……。ためらいながらナラ、センノキ、ヤマナラシでつくって送ったオオカミウオの家族が、3匹共売れてしまいました。後日きた画商からの手紙には、「皆さん足を止めてニッコリなさっていました。」とありました。今の世の中って不思議ですよ。

☆しみずあつし／呼人・森の家／網走



の非会員（私もその一人ですが）も含め、現在 31 名の会員がおります。今回の展覧会では、環境という複雑な問題を考える第一歩として、あらゆる形で我々の生活に関わっている「木」を切り口に、各会員がテーマを設定しました。環境部会は今後も開かれた部会として、運営していく方針です。今回の展覧会や直接建築に携わっていない方もお気軽においで頂き、感想意見等お聞かせ頂ければ幸いです。

INAX スペース

札幌市中央区南 2 西 2

住友生命札幌南二条ビル 1 階

TEL:011-271-1710

9 / 1 (日) ~ 26 (木) 10:00 ~ 18:00

☆うちのはるひ／風の記憶工場／札幌

## 「家具デザインの行方

### 批評／国際家具デザインフェア旭川 '96」

進行；ものけん事務局

7月25日(木)午後6時半～、エルフィンランドにて  
参加者／約15人

●7月4日～10日にかけて開催された「国際家具デザインフェア旭川 '96」のコンペティション入賞・入選作品を取り上げディスカッション。以下、当日の主な発言から。

「新しいものをつくるべしという中で、木だけでつくる無理はないか？素材＝木の枠を広げても良い。」

「椅子らしい椅子だけでなく、形を楽しんだ、こんなこともできるという作品がもっとたくさん出てきて良い。」

「家具とは何か、家具に何ができるかということに主催者も参加者も、より挑戦的でありたい。」

「主催者の意図がおおざっぱ。何がしたいのか、選び方の姿勢をもっとはっきりさせたほうが良い。例えば最終審査はオープンなディスカッションにするなど審査員の顔が見たい。入選するにしても落選という結果になるにしても、どのような基準でそうなったか、より多くの（特に今回の場合、地元の）人々の理解を喚起するようなコンペのシステムづくりが求められる。審査員が選んでそれでオシマイってんじゃなくて。」

「椅子なんかはこの百年、アイデア・デザイン・完成度などどれをとっても、あらゆるものが作られてきたように思う。今回、圧倒的に新しいものがあったかどうかかわからないけれど、"リ"デザインとして何らかのアイデアを家具にし、完成度を高くして評価を得るということは大いにあると思う。単純なデザインのレベルで仮に評価されなくても。」

「ちょうど良いボリュームというものを生産するシステムがあるべきで、それに合う良い形態が見つけれられるといいと思う。ウェグナーの椅子を作っている工房を見にいくと、システムがうまくできていて、素朴な機械、12、3人のクラフトマンという体勢でも、治具をうまく考えだし、何工程かかけてきれいな形が生み出されている。数をそれ以上作らないという前提に立つから、システムを変えない。それを量産したところで同じ品質にな

るはずなのに、なぜか違う形のものが結果として出来てしまう現実がある。」

「量産の反対側にあると思われるクラフト的なものは、何か問題があっても許されるというようなところがある。本当に好きなら、まずくても汚れていてもいいと思ってしまう。そんな使う側の入れ込む気持ちがそうさせる。でも、量産の工業製品でもそういう気持ちにさせるものはあることはある。」

「これいいなって思う感覚は人によって少しずつ違う。旭川はこういうのがほしいというイメージを

## 「Time & Space between 札幌 & さっぽろ」

進行；八代克彦氏（札幌市立高専）

8月13日(火)夜

"ワークショップ「生きられた土地」"会場

札幌市中央区南3西6、7-2の空き地

参加者／約25人

●...札幌の中心にぽかっと空いた地面の上で試みられるいくつかのパフォーマンス・ワークショップ。『都市と人間、自然との関係の再構築。環境とその環境の中に生成する表現としての可能性。』...と題されて開催された、廣瀬智央+植田暁両氏によるイベントの会場にての一夜の"ものけん"。

札幌の街中にちりばめられた時間・空間に関するサブリミナルなメッセージを読み解くフォーラム...八代克彦氏によるスライド及コメント。そして何人かの言いたい放題。

## 八代克彦／ゲニウス・ロキ

8月13日の夕方、札幌のど真ん中、創成小学校と道ひとつはさんだ空き地で、廣瀬智央さん、植田暁さん主催のワークショップ「生きられた土地」に便乗して、札幌という街について考える機会を持ちました。中心は、街のサブリミナルメッセージを、複数の人の持ち寄ったスライドであぶり出せたら、というものでした。たくさんの人が集まってくれました。なんらかのメッセージなり、サブリミナルメッセージが送れたかどうか私にもわかりません。スライドの内容を簡単に紹介しますと、複眼的3部構成です。

まず、札幌新参者の私が北海道に来て旅行した時のスナップ写真から、心に残る構築物とそれに似た風景を20組ほど映しました。構築物は風景のメタファーともとれるし、両者がお互いのデジャビュのようなものとして私に意識されたものです。北海道という風土は、そこで生まれ育った人がそ

こにモノをつくる時、なんらかの作用をするのではないか、という至極単純な発想に基づくものです。

第2部は田村陽子さんと永田まさゆきさんという札幌の主ともいえるお二人のスライドを併写しました。奇しくも田村さんは7年前に真前の創成小学校を卒業されたということで、昔の貴重な風景を見ることができました。一方、永田さんは藻岩山の山頂からの中心街のズーム写真にはじまり、彼取って置きのお気に入りの街並みを見せてくださいました。スライド後半になってお二人のスライドはともに街路樹にフォーカスをあてていたのが印象的です。といっても、これは私がそういった順番にしたのですが、いずれにしても札幌の街で樹木はお二人の中で原風景の一部になっているようです。

第3部は中村昇さんと高橋三太郎さんのスライドです。中村さんは南区、高橋さんは北区にお住まいで、札幌の両極端から中心部に向かって日頃慣れ親しんだ風景を撮ってきてくださいました。同じ札幌でも、これほど風景が違うものかと再確認した次第です。中村さんは豊平川に導かれて中心にアクセスするのに対し、高橋さんはアメリカ的オープンワイドな道路の風景が続きます。中村さんのスライドでは川や樹木が、フレームのなかで大きな面積を占めるのに対し、高橋さんのではやけに空が大きいのが印象的でした。地平線というよりは天空線として大地と空の境界が意識されました。後日談ですが、ある朝、中央区からタクシーに乗って南区の山の中にある学校（札幌市立高等専門学校）に向かいました。タクシーの運転手いわく、「この時期、駅から北には行きたくない。なにしろ街に帰ってくるのにやたら時間がかかってしょうがない。商売あがったり。」なのだそうです。

それから、小林令明さんが飛び入りで四季折々の札幌を披露してくださいました。そこでは雪の存在がクローズアップされ、オブジェと化した除雪された雪や、雪のように地面を覆うタンポポや芝桜が印象的でした。雪が降ると地上の人為的な境界が全部消されてしまうわけですが、タンポポは私にとって春の花であったのに、なぜか雪のない間ずっと目にする植物であり、まさに四季の境界を消す、いわば時間的バリアフリーをもたらす花のようです。

それからなんといってもメインイベントはナンシー・フィンレイの空地に対するお話しでした。"アーバン空地サービス"なるおもしろい言葉は、都市の隙間に対するウイットにとんだ軟らかなまなざしを私に示してくれました。私のお気に入りの曙中学校のグラウンドの真ん中にでんと居座る春楡

の大木に対して、彼女は軟らかな口調で let it go! という言葉を確か言ったように記憶しています。古いものに対するセンチメンタリズムよりも、その大木がおかれた環境を憐れむようでもありました。案楽死とかゲニウス・ロキという言葉の思いだしました。

そんなわけで、8月下旬に中国に行ってきたまだ頭が朦朧としていますが、1996年の夏の札幌の備忘録として書いてみた次第です。こんな機会を与えて下さった廣瀬智央さん、植田暁さんに、末筆ながら御礼申し上げます。謝謝！（やしらかつひこ）

## 植田暁／ある空き地の10日間

先日札幌の真ん中にある空き地に10日ばかり住みました。朝は7:30丁度に鳥のけたたましい鳴き声におこされ（それもそのはず、僕らの張ったテントの傍らの木の上には鳥の巣があったのです）、8:00には既に都心へ通勤する1台につき一人という人口密度の自動車が前の道を埋め尽くし始め、8:30くらいからグランド・ビルという由緒正しきモダニズムのビルの取り壊し作業の音が始まり、仕方がなく9:00位にのそのそと起きて、モーニングセットを食べに行くという生活でした。

これは留学時代の友人で美術作家の廣瀬智氏と僕が核となり、多くの友人達によって練り上げられた、コミュニケーションを題材にした「アーバンアクティビティ・生きられた土地」という企画の一部としてのパフォーマンスだったのです。

ちょっとだけ主旨を述べると、昔、経雌という神様が都市は濃密な人と人、ものとも、人ともとのコミュニケーションの場として作ったそうです。そうすると、モダニズムの論理が浸透している現代都市というのは、もしかすると一見自由で濃密に見えて実は極めて平坦な、自発的なコミュニケーションが希薄な空間なのかもしれません。

そんなわけで、この夏札幌の中心部で、対話のための交通空間をつくることをもくろんだのでした。

「何これ？」と思って、思わず足を踏み入れる状況を提供して、不特定多数の相手に多様な対話のきっかけをぶつけてしまえというわけです。そのために仕掛けたのは祝祭的な装置に乗った日常空間の他に、幾つかのワークショップと、札幌を拠点とするグループにこの空間を利用してもらうことでした。後者に関しては、この工房だよりを精力的に出版している永田さんが中心メンバーの一人である「ものけん」、アート好きの若者達が組織している「Sapporo Cafe」の二つの参加が実現しました。ここで双方のコメントを聞いてみましょう。

” 今回のカフェの舞台は「札幌そのもの」ということで、参加者にはカフェの参加ツールを受け取り、好きなどころに移動してもらおう。その袋を持っている間は、その人がカフェになるというわけ。／カフェになった参加者は、好きなどころに移動して喫茶店やクラブ、どっかの路地、公園、どこでもカフェの空間にしてしまう。そしてそこで得た情報、話した内容、手に入れたものを全部袋に詰めてまたベースキャンプがある空き地に戻ってくるというわけ。家に帰ってから次の日に空き地に袋を持って来た人は、家にいる間もカフェになっている。／まだ袋を持ってきていない人がいるから、彼らは今この瞬間もカフェを続けているのだ！！／これぞ札幌カフェ。早く札幌がいつでもどこでも自由におしゃべり出来る空間になればいいのに。／(Sapporo Cafe プロジェクト・千葉晋也・まちづくり情報センター札幌)”

こうしてみんなの創意によって、誰も振り返らなかった空き地は「生きられた土地」となりました。ここでは日常の具体的な生活をもう少し続けることにします。午前中は近隣の人々がぼつぼつやってくる、そして夕方からだんだん人の渦が高密度になり、ピークは 20:00 から 02:00 程度。いわゆる建築、都市計画関係、アート関係の仕事をしている 40 歳代以上の人たちは 23:00 位まででしょうか。Art boys & girls を中心にその後はだいたい 04:30 まで対話空間が継続し、空が白んできてみんな帰る、我々は就寝するという日常が繰り返されました。我々の他にも宿泊を通してパフォーマンスに参加した人は 9 名、またこの交通空間にはまって毎日のように来た人には道庁職員から、札幌高専の生徒、裏のマンションに住む女性まで様々な人種でした。

パフォーマンスは都市居住シミュレーションであったため、最低限の居住環境だけを用意し、あとは都市を最大限に使いこなすことをもくろみました。実際のツールはテント、若干の着替え、洗面具にお風呂セット、クレジットカード、記録のためのカメラとノートパソコン。従って銭湯に通う、町中の飲食店で食事をする、さらに公共、民間を問わず、極力都市的サービスを活用して生活をしました。排泄処理は朝は地下鉄の駅や場外馬券場、昼はホテルやデパート、夜は各種飲食店にお借りました。

別に特に空き地だから考えたわけでもないのですが、最近対話の欠如ということをよく考えます。みんな難しいことを言い過ぎているのではないかと、実は同じことを言っているのに使っている言語が違うために激しい戦いを繰り返しているのではないかなどなど。世の中を見ても身の回りを見ても、

自分が日常的に他人としている対話をふりかえっても。

この空き地でどういうコミュニケーションが生まれ、コミュニティが生まれた（或いは生まれなかった）かは、乞うご期待ということなのでしょう。

(うえださとし／風の記憶工場／札幌)

## 花房晴美ドビュッシーの世界

### I 花房晴美ピアノリサイタル

10月5日(土) 7:00PM

東京文化会館小ホール

♪ドビュッシー：前奏曲集第1巻、第2巻

### II 花房晴美・花房真美ピアノデュオリサイタル

10月30日(水) 7:00PM

東京文化会館小ホール

♪ドビュッシー編曲による2台のピアノと連弾のための作品

♪ワーグナー「さまよえるオランダ人」序曲

♪シューマン：カノン形式による6つの練習曲 Op.56 ほか

「平成8年度文化庁芸術祭」参加

※入場料；各々6000円、I,IIセット券10000円  
都内主要プレイガイドで発売中

## 加藤祐子・田村陽子

### ファイバーアート二人展

10/10(木)～15(火)

アートスペース201・B室

札幌市中央区南2条西1丁目山口中央ビル

## 飯島孝著／技術の黙示録

### 技術と人間／¥3,800 + 税

～複製の技術の極限にあるコンピュータが、何を私たちにあたえているか。その技術は、天にいたるバベルの塔であり、ひとの傲慢によって築かれてはいないか。クレーが描く「新しい天使」、翼をひろげた歴史の天使が、戻ることのできない、進歩という風を受ける。天使が瞪る未来に何が映るのか …。

(いいじまたかし／岐阜経済大学教授)

八月二十八日。ここからはじめよう。数日、三十度を割ってさわやかな風が吹き北海道の空気を思い出してしまう。

ひさしぶりに海岸で寝ころびながら怠惰な時間を過ごそう。乾燥した空気の向こうから押し寄せる光線はそれでも夏。溢れる浜辺の景色はかすみのように感じてしまうくらいに目の焦点はずれているらしい。目を細くして凝視すれば、夢かうつつか。

白くて平らな小さいおなかは緩やかに続いて、黒い陰毛は、それがそこにあることの意味と無関係に只そこにあることだけ。

控えめな主張すらしていない。肘やかかたが自己主張をするときは寄生主に対して苦痛や披露を訴えるような場面でののだろうか、これが主張をする時というのは非常に個人的な事情による、情緒の律動だ。

とにかくそれはそこにあって、白い腹の冷たい感触や、窓からの光線を受けてシルエットは漠然として光と陰も融け、時間も停止した。

彼女はそこにたたまみながらトルソーのように体を曝している。

午前中に吹いていた風はいつのまにか、南風に変わり湿気を含み始めた。

夏の海。波の音は嬌声に変わり、体にまとわりつく塩水は女の体のように悦楽を呼び覚ます。水に潜れば、口や鼻からあふれる気泡のはじける音も郷愁の記憶と回顧の連環だ。足の裏から伝わる熱すらも、一カ所に踏みとどまることを許してくれないし、ここで想像を静かに楽しむことなどは思いも寄らないが、大勢の群衆に紛れて匿名の人間がごく個人的に太陽と水との感触を楽しむことがこうも怠惰だと、悦楽と思惟は肌の上で乾燥して、小さな塩の結晶になり、皮膚を突っ張るような感じにさせる。

水の抵抗に疲労を感じて、冷えた体と空っぽの頭がじりじりと焼けてくると今度は入れ替わりに、怠惰が小さな塩の結晶に浮いているのが見えてくる。

白い腹の周りの輪郭は窓からの光線に遮られるようにして、はっきりしないが、彼女は若い。弾力に満ちあふれている皮膚はその中身と同様に傍若無人に時間の経過に無頓着でいられる。その無知につけ込んで陵辱を試みるのだが、彼女の所有するエネルギーは飛び散る汗よりもずっと、重厚でなによりも明確な意志を持ち始めている。

波は繰り返しやってくる。小さい波、いくつか繰り返しているうちに力を溜めていたかのように強いのがやってくる。波の頂上は緩やかにもりあがり、少しずつ角度を増す。水が伝えるエネルギーは意志を持ってそこで遊んでいる人間たちを愚弄しはじめている。彼らは戯れているだけだと信じているから、頂上の角度を増しつつある水の意志について誰もそれとは気がつかないが、盛り上がる水と同じ量を周囲から引き寄せる時に生じる、強い引きは一瞬、人を不安に陥れるが、すぐに盛り上がる水の流れに打ち消され、むしろ続く打ち寄せる波の力は岸に向かって働くのを感じて安堵する。

だがこのときはいつもとは違っていた。角度を増した波の頂上は持ち上がる力を持続しきれずに美しい白い気泡を順番に左から右へと従って崩れてゆく筈だったが、それはみると、角度を増し、引き水は周囲の人々の足をさらい、倒れた者を小石のように飲み込みはじめた。異変に気がついた時には角度を増した頂上にいる人間の目に映る景色は海からの眺めではなかった。まるでビルの屋上からの眺めのように陸上の遠くの景色が見えてしまうのであった。海岸に注ぐ曲がりくねった川の形がきらきらと反射している。向こう岸には工場の煙突がのんびりと薄い煙を流しているのが見える。

次の瞬間鋭い角度をつくっている頂上はさらに前にいる人間を持ち上げ、次々と連鎖して行く。そして頂上にいた人間の視界は水の壁に遮られて水の表面に浮かぶ細かい髪ばかりが沈黙の空間を埋め尽くす。

自分がその頂上から滑り落ち、巨大な気泡の流れに巻き込まれなかったことへの一瞬の安堵は、水の壁の向こう側で今しも起きているであろう突然の水による自己主張を受け入れかねている人々の恐怖に思いをいたすのだが、自分が現在おかれている位置を自分の力で修正することの不可能さを察知するとすぐさまそれは恐怖へと変容するが、そのようなときに限って想像力は冷静に水の意志を観察していた。

彼女の細いからだを強く抱きしめて、それは愛情からなどではなくやり場のない情動をボキボキとへし折ってみたいと脳裏をよぎっただけのことにすぎない。この柔らかい皮膚を通して冷たい体温と、水分を多く含んでそれだけで生命の輝く香りを抱きしめて自らの生命を照らし合わせることで、いつときりビド一の交歓は体を痙攣させる。筋肉を一瞬に収縮させるのは次にやってくる解放への備えであり、解放は収縮への前段階でもあるのでそれが短時のうちに繰り返すことが双方の確

認作業なのだ。

そのサイクルの内側で神経までもが何かをつき崩す。

それは一瞬の死。

細くて白く、柔らかなバランスを内側にたわわな水分と傍若無人なエネルギーをいっしょくたに持ちながら、それらの一つをも意識をすることがないから光輝いてしまうのだろう。それは眺めて鑑賞すればよい。

それをボキボキとへし折り痙攣の渦に巻き込めば、美しかった腹からのなだらかな形の変化は皺を寄せ、乳房はへし曲がり、性器は醜く粘液をへばりつける。ふたつの尻の形はそれだけで死を含む詩で、それに続く背中への旅はすべての女性への賛美であった筈なのに、そこへ打ちつける律動は死を迎えるには現実的ではない。何という醜さだ。うつくしいからだの片鱗も見えないが、傍若

無人なエネルギーが一瞬の死を希求してその細い足首をつかむ。押し広げ、塞ぎ、ねじ曲げることが時空いっぱいになり音を伴う。次の瞬間に彼女の表情が見える。どこをも見ていない焦点が波にまかせて虚ろに空間を浮遊する。およそ形とは何だ。美などは醜への前段階でしかない。美が死を合理化することはあっても死そのものを形成することはできない。耳を聳するばかりの律動よ！

一瞬の死だ。

波が気泡の従者を従えるように、その力を表現する怒涛は死。

波が一瞬の死と醜い肉体の角度を無化する。

垂れ落ちるよだれを啜ることもできないくらいに死が現実であれ。

☆すがぬまろく / TONCACCI ATELIER / 茅ヶ崎市

## 原ななえ

### ファーファ

わたしが大好きなのは、ゴロゴロしているひととき。お供は、フワフワお布団、洗いざらしタオルケット、クシャクシャシャツに、ぬいぐるみ。ぬいぐるみは、なんでもいいわけではなく、このわたしの、厳し



い審査をくぐりぬけたものばかりだ。その一つに、ファーファがいる。あの柔軟剤のファーファである。CMにでてくるくまは、私の心を、しっかり掴んでしまったのだ。普通のくまに比べて、だいぶつぶれたファーファのかお、つぶらな瞳に、真白ではなく、使い古されたムートンのような体。洗濯ものの中から、あんな顔をのぞかせていたら、も一たまらないっ！「アメリカファーファの魅力は、イギリスステディベアと違い、フランクな感じのくまであること。」(旭川在住ファーファファンS氏談。

ファーファには、熱狂的なファンが他にもたくさんいるのだ。)イギリスステディベアが、森の中で自分のくらしをもって、生きていそうなのに対し、アメリカファーファは、家にでてくるねずみのように、洗濯ものの中にまぎれこんで暮らしてそう

である。だから可愛がりたくなってしまうのかな。

ファーファ日本上陸当時は、柔軟剤を買って応募しなければ、手に入らなかった。が、アメリカでは買えるといううわさを聴き、早速アメリカで探したのである。アメリカでは、柔軟剤の名前は、Snuggle: スナグーという。(もちろんくまの名前もスナグー)スナグーは、玩具屋にはなくて、なんでなのか、グランドキャニオンのおみやげ屋なんかにはいたのだ。Tシャツや絵ハガキにまじって。こんなふうに、旅までして、ものすごく探したというのに、ファーファは、旭川を訪れたことがあるのだそうだ。灯台下暗し。ファーファファンは、握手なんかまでしてもらえたのだそうだ。くやしい。

で、ファーファ好きが、ゴロゴロ好きが自分の欲しい家具をつくると、こうなる。見た目よりもずっとすわりやすい。すわるというよりも、抱きつきやすい、とか、遊びやすい、とか、とにかくとても気持ちいい。

これらの家具についての問い合わせは下記まで。

インターネット <http://city.hokkai.or.jp/agra/>  
あぐら家具企画 北海道旭川市1条19丁目左10号  
Tel.0166-34-0898

☆はらななえ / あぐら家具企画主宰 / 旭川



## 神永真理子／トンネル山開拓団レポート 思い切り試行錯誤

今年の春、私たちにとってウソのようにラッキーな話がアツという間に決まって、永田さんの畑の開拓団に加えてもらいました。名前だけしか知らなかったコリアンダーやエンダイブ。いつか作りたいと夢見ていたソバの白い花や手に余るほどの赤ジソ。まだ青いトマト。それにジャガイモやえんどう、大豆やニンジン、小ネギ、シトウ、ピーマンなどなどが今、私たちの目の前にあります。

「畑？いいね。やってみたい」土とは縁遠かった者たちがそんな軽いノリで集まり、人が人を呼んで、つごう14～15人でかわるがわる畑づくりを体験する結果になりました。もちろん、中にはひそかな野望？を持っていた人もいでしょう。でもそれも、季節の流れに飲み込まれてどこかへ消えていったはずです。こんなスタイルは、畑づくりというより「畑あそび」に近かったかも知れません。実際、畑の方はほどほどにして山歩きや山菜採りに予定変更したり、ときには近くのフロで、それほど出ない汗を流したりしました。大都会だと信じられているサッポロで、しかもごく都心に近い小別沢で、羊や山羊・ニワトリを飼い、自家用の野菜畑を作っている永田さんたちの暮らしぶりに、もともと興味を引かれていた私たちです。そのうえ地下鉄駅から車で10分というロケーションは、通い畑には有利な条件でした。いくらヤル気があっても、遠くては続かない気がしたからです。それに去年まで羊の放牧地だった土地なら、きっと肥えているでしょう。

さて畑で「何をどう作るのか」は、深く考えずにやってしまいました。それで良かった面もあるし、悔やんだ面もあります。例えば、あまり日当りの良くないところにトマトの苗を植えたことに気付いたときはもう遅く、花が咲き実が付きはしたものの、なかなか赤くならないのです。それならと、「フライド・グリーン・トマト」を試しに作ってみましたが、味は大きな？でした。また、予想以上に伸びたツルありインゲンは、短い支柱から上に行き場がなくなり、からまりあって垂れてくるありさまでした。さいわい、人に笑われるのを気にするような人は私のまわりに集まって来なかったのも、思い切り、貴重な試行錯誤をすることができたのです。以前に名前だけは聞いていた福岡正信さんの自然農法の本を読んだり、長年畑を作っている友だちに電話でアドバイスを求めたりのにわか勉強。そんな私たちでしたが、「お店で売っていない何種類かのもの」を作ったのはヒットでした。

はじめて食べたロケット菜とかエンダイブ、そしてハーブ類（コリアンダー・ディル・バジルなど）は、独特の香りと味で食生活に彩りをそえてくれそうです。生のコリアンダーが病みつきになった人もいました。余ったら

どうしよう？と思っていた赤ジソは、たまたま何十キロも梅を漬けたというTさんにまわし、かわりに出来た梅干しをいただくことになり大満足。物々交換の妙味を覚えしました。とりたてのターツアイやえんどう、大根やカブのおいしさを知ってから、スーパーで売られているポリ袋入り野菜・果物の味気なさに、今さらながら気づきました。「色と形はそれらしいけど、これじゃイカンイカン。野菜ってこんなものじゃないはず。」とつぶやいています。

今年の夏、忙しいわりに疲れを感じませんでした。「畑の野菜からパワーをもらったせいかな？」と勝手に思っています。

☆かみながまりこ／喫茶・ひらひら／札幌

## 永田まさゆき／編集後記

■8月11日、炭焼きをここトンネル山で行いました。先生は杉浦銀治さん。酷暑の八王子からやって来て、炭焼きの入口に参加者を立たせてくれました。炭材の樹木は井田氏の父上が暇をつくっては刈って用意しておいてくれたもの（父上は山のふもとから通って来るのにマウンテンバイクまで買ってしまった！）。1畳ほどの「伏せ焼き」2カ所、直径1メートルほどの「穴やき」、「ドラム缶がま」と盛りだくさんの手法を体験できました。今日炭はその効用について、環境浄化だの健康法だのとよく取り上げられますが、僕はむしろ能動的な暮らしのスタイル～文化の自給とでもいうような観点からとらえ、考えていきたいと思いました。杉浦さんは国内外での指導のためにスケジュールがいっぱいで、「この後すぐブラジル行きです。」とのこと。山の背を這う大量の炭焼きの青い煙は、それは美しく、ビル街にまで届け...という妄想が頭をよぎりました。

■知人主宰の近所でのコンサートにさそわれ、出かけた夜は雷雨。営林署のオープンなホールが会場。建物は大部分はRCで、木軸の4層位吹き抜けのホール部分がそれにくっついている（ちょっとオーバーに）。大きなガラスのカーテンウォールを背に、まずマイケル・ザレツキーのピアノで、バッハの「組曲第3番ハ長調」。トタン屋根に雨粒の音、ガラスの向こうに雷光！...ふと戦火を想ったのは僕だけではないはず。戦場のバッハ。映画でも小説でもない眼前にあるはずの戦いの状況から意識は遠く毎日あることを、時々思い知らされます。ドンパチは身近にないのかも知れない、しかし、別にインターネットの時代を気取るわけではないけれど、五線譜に描かれたおたまじゃくしのように、僕たちの毎日と戦いは十分すぎるほどリンクしています。（編集人）